

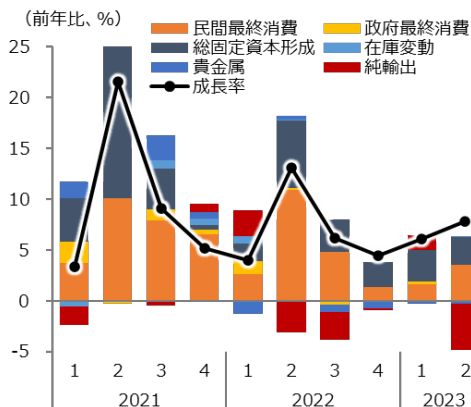
インド

GDP (2023年4-6月期)

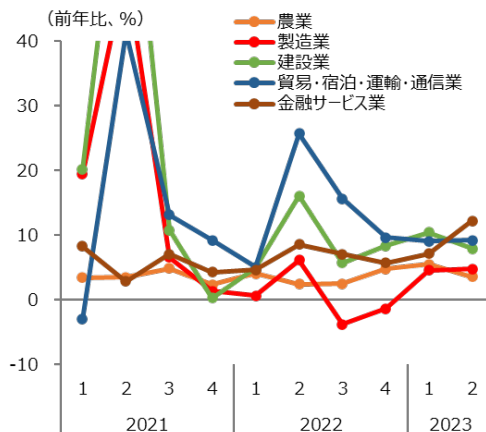
内需は堅調さを継続、資源・食料価格の行方が波乱要因

政策・経済センター
金成大介
03-6858-2717

1 実質GDP成長率



2 主な業種の付加価値成長率



評価ポイント

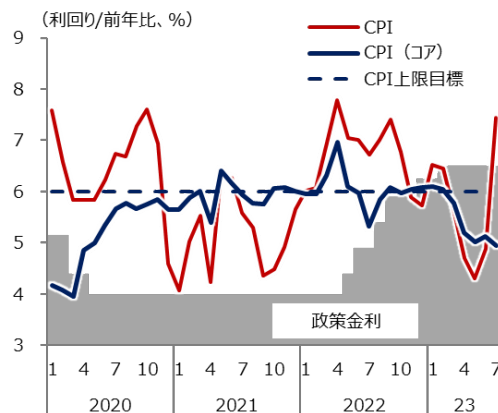
今回の結果

- 23年4-6月期のインド実質GDP成長率は、前年比+7.8%と23年7-9月期の同+6.1%から成長の勢いが加速した。輸出不振、消費拡大による輸入増から純輸出が成長下押し要因となったものの、堅調な民間最終消費や総固定資本形成が成長をけん引した（図表1）。
- 業種別では、金融サービス業が前年比+10%超の成長となったほか、23年1-3月期に続き、全産業がプラス成長を確保している（図表2）。

今後の注目点

- 先行き、インドの内需は堅調さを継続することが見込まれる。23年8月の金融政策決定会議事録で、インド中銀は脆弱な外需、不安定な国際金融市場、地政学的な緊張等の海外要因を向かい風とする一方、家計および企業の良好なマインドのもと、家計消費、設備投資ともに堅調推移を見込んでいる。
- 好調な消費・投資の背景には、インフレ圧力の沈静化がある。23年7月に入り熱波によるトマトなどの収穫量減少からCPIは急騰したものの、食料・エネルギーを除くCPIは中銀目標（2～6%のレンジ）に収れんを継続、インド中銀は、23年2月の利上げを最後に政策金利の据え置きを続けている（図表3）。
- 足もと、インド政府はコメ、タマネギ、小麦などに輸出規制や関税措置などを導入し、家計影響が大きい食料価格の抑制へ取り組んでいる（図表4）。こうした状況下、インド中銀は、CPIは年後半にかけ5%台へ低下、実質GDP成長率を23年7-9月期：前年比+6.5%、同10-12月期：同+6%、24年1-3月期：同5.7%、23年度（4月-3月）：同+6.5%と予想している。
- 想定通りにインフレ圧力が沈静化すれば、インドは前年比+6%程度の成長を維持するであろう。ただし、ロシアのウクライナ産農産物の輸出合意の履行停止、サウジアラビアの原油減産などから国際商品市況が騰勢を強めている。国内価格抑制のためのインドの輸出規制が、国際商品市況の上昇をもたらすおそれもある。インド経済の波乱要因として、資源・食料価格の行方には注意が必要だ。

3 CPIと政策金利



4 食料価格抑制への主な取り組み

品目	内容
コメ	<ul style="list-style-type: none"> 7月：非バスマティ白米（除くパーボイルド米）の輸出規制を導入 8月：パーボイルド米の輸出に20%の関税を決定、即時発効
タマネギ	<ul style="list-style-type: none"> 8月：タマネギ輸出に40%の関税を導入。緩衝在庫の30万トンから50万トンへの積み増しを発表
小麦	<ul style="list-style-type: none"> 8月：ロシアからの小麦輸入協議中との報道、小麦輸入の関税引き下げの可能性を示唆
砂糖	<ul style="list-style-type: none"> 8月：10月から砂糖輸出禁止の可能性の報道

注：非バスマティ白米は、インドの主食かつコメ輸出量の2～3割のシェアを占める。この内、パーボイルド米は、精米前に蒸して乾燥させたコメ。
出所：NNA ASIAより三菱総合研究所作成